

西高サッカー部

50周年記念誌

西高サッカー部OB会

記念誌の刊行に寄せて

西高サッカー部OB会 会長 寺田 格郎

創部50年を機に記念誌をとの提案は、編集から出版まで労を費やされた土岐・城戸両先輩に依るものである。50年の歴史は長い。御兩人はもとより創部当時の部員だった諸先輩方の感慨は察するに余りある。私はこの先輩方と一緒にボールを蹴っていた1年生の頃、50年後を考えたこともなかった。現役時代に仲間の一人が「俺は将来、西高周辺の土地を買占めて立派なグラウンドを寄付するのだ」と語った。この友人の抱いた先見構想に心を打たれたのを思い出す。周囲は麦畑だった。50年を経て彼が財を成した現在、西高の周りは住宅で埋まりグラウンドどころではなくなっている。

記念誌刊行は、OB会として編集委員会も設けずに全てを御兩人の手にお任せした。それがスタートしてから数年を経過してしまった。早くから原稿を寄せて下さった方は、一体どうなったのだろうとっておられたであろう。時間は掛かったが50年に及ぶ各期からの原稿が揃った。出来上がった記念誌は決して豪華なものではないし皆さまの中には御不満があるかも知れない。しかし、後輩のために部の歴史を残して置きたいと大先輩が心を込めて手掛けられた一巻なのである。

私は、卒業後も西高通いを続けて後輩諸氏の現役時代を大方承知しているものの、寄稿された文面から「そうであったのか」と今にして思うことが多い。そしてそれぞれが部活を通してサッカーを楽しみ、あるいは苦渋に満ちて考えたり、さらには堂々たる理論を展開するなど豊かな人材を輩出する西高の誇りとなる内容である。50年の歴史が築かれてきたがサッカー部の歴史の重みはいつまでも後輩に引き継がれて行くものと信ずる。

原稿を寄せて下さった方々、積極的に協力を賜わった方々に厚く感謝し、刊行に御尽力いただいた土岐・城戸両先輩に心から御礼申し上げる次第である。

記念誌の作成に携わって

十中 7期 土岐 高史

西高サッカー部の50年記念誌の作成に当って、先ず苦勞したのが原稿が集まらないことだった。そこで、会長の寺田さんに頼んで書いてくれそうな人約140人をピックアップして貰い、直接原稿を依頼した。同時に活動記録を記入する用紙も配って記入して貰った。その結果、69人から原稿が集まり、更に、3人の顧問の先生からも原稿を頂いた。活動記録も大体できた。また、対外試合については、1956年に都立西高等学校生徒会によって創刊された「蒼樹」という雑誌に運動部の記録が1978年まで載っており、これをもとに前後を集めて作成した。更に、個人原稿、記録を各期のキャプテンまたは執筆者に頼んでチェックして貰い、漸く出来上がった。この間、大変時間が掛ったことについては、深くお詫びします。

個人原稿については、各期少なくとも一人は書いてくれ、記録についてもまずまずの出来だと思っています。原稿を読みますと、西高サッカー部の創立以来の歴史がおのずと浮かんで来たようです。一言で言えば、サッカーが好きなものが集まって作り上げたのが西高サッカー部と言えるでしょう。誰かが書いていましたが、自分は西高で無くてサッカー部を卒業したのだと。私も西高からサッカー部を取ったら何も残りません。

この伝統を作ったのは、各期の部員の活動とこれを支援したOBの指導が大きいと思いますが、ここで特筆しなくてはならないのが寺田会長の功績だと思います。私も長いこと会長に任じていたが、実質的に動いたのは全て現寺田会長でした。

西高サッカー部の100年記念誌を50年後に作ることにしたいと思います。この伝統がそれまで続くことを願ってやみません。

目次

記念誌の刊行に寄せて……………	西高サッカー部OB会	会長	寺田	格郎…	1
記念誌の作成に携わって……………	十中	7期	土岐	高史…	2

I. 個人文集

1. 顧問の先生

西高サッカー部のルーツについて……………	上島	周蔵…	9
サッカーと私……………	星野	五十夫…	10
西高サッカー部創立50周年に当って……………	三浦	史朗…	11

2. OB諸氏の追想記

始まりの頃……………	十中	7期	志村	正二郎…	13
西高サッカー部の成り立ちについて……………	7期	土岐	高史…	16	
サッカーから学んだこと……………	7期	土岐	高史…	18	
思い出……………	西高	1期	関	昭五…	19
私と「西高サッカー部」……………	2期	城戸	昌夫…	21	
私の西高サッカー部……………	2期	高村	眞司…	28	
西高通学50年……………	3期	寺田	格郎…	31	
サッカー部の土台を築いた先輩たち……………	3期	寺田	格郎…	34	
草創期の合宿……………	3期	寺田	格郎…	39	
クロさんの思い出……………	3期	中島	裕…	47	
我らが青春の思い出……………	4期	合同	執筆…	48	
サッカー人生のスタート……………	5期	恩田	耕…	49	
「流血メーデーのころ」……………	6期	高橋	克彰…	50	
リストラの渦の中で……………	7期	荒張	義光…	51	
アメリカから……………	8期	松島	晃…	52	
サッカーに魅いられて……………	9期	梅田	清…	55	
思い出……………	10期	内藤	隆史…	55	
サッカー部の火を守って……………	11期	石島	紀之…	56	
西高時代の思い出よもやま……………	12期	村上	錠作…	57	

思い出	13期	白石	紀彦	58
新人戦ベストフォーへの道	13期	田代	忠之	59
西高サッカー部の仲間	14期	樋口	洵	60
皴ちゃんの思い出	14期	藤原	正彦	61
皮の風船	15期	小林	武	64
思い出	15期	山下	邦男	64
私の西高サッカー部時代	16期	平尾	修	65
西高のサッカー	17期	川上	徹治	65
サッカー部にいた頃	17期	宮地	信良	66
『我々を育てた西高サッカー部』	18期	小安	亮	66
東京オリンピック時代の思い出	18期	橋本	明	68
我がサッカー人生の原点	19期	富田	六郎	70
寸 描	19期	中村	健一	71
30年経っても思い出すのは	20期	赤澤	優	72
「30年たった名キーパー」	20期	浅川	正健	73
「シワちゃんがない！」	21期	石川	順一	76
22期でもっとも記憶に残ったあの大会	22期	千田	幸雄	77
「思い出の2ゴール」	23期	遠藤	譲	77
西高サッカー部50年誌に寄せて	24期	井口	敬次	78
ハーフ・タイムの頃	25期	福田	節	79
「花の26期再結成」	26期	南波佐間	浩	80
やってよかったマネージャー業	27期	本橋	信子	81
1年生時代の思い出	27期	八木	伊知郎	82
思い出	28期	加藤	就一	83
怪我の功名?	28期	中井	康二	83
残 像	28期	萩野	新	83
真剣に生きていた	29期	高原	明生	84
大島合宿のことなど	29期	野崎	知	86
一冊のコピーから、つれづれなるままに	30期	石橋	亮	88
元旦に思う	31期	鐘ヶ江	宗人	90
西高サッカー部の思い出	32期	小山	馨	91
夏合宿の思い出	33期	高橋	泰彦	91

秋と春に2年連続で都大会出場	34期	藤谷	健	92
「サッカーノート」	35期	大塚	祐貴彦	93
私の監督時代と価値観の形成	35期	沖	有人	95
西高サッカー部の思い出	36期	東	美津江	96
思い出	37期	平野	直己	98
サッカーのおもしろさ	38期	内門	かおり	99
ダッシュ・ターンとインターバル	39期	萩野	源次郎	101
楽しかったマネージャー時代	40期	石塚	由喜江	103
ドイツから	40期	土屋	潤二	104
我が西高サッカー部	41期	石川	裕載	109
サッカー部で得たもの	42期	奥村	英彦	110
もうひとつの戦い	43期	横澤	宏一郎	112
西高サッカー部と私	44期	大見	頼一	113
振り返ってみて	45期	高橋	潤	115
コーチとしての西高生活	46期	牛島	健	115
私の宝物	47期	田村	佳美	116
48th サッカー部	48期	山口	真司	117
わたしの宝物	49期	武山	倫子	120
サッカーがしたい	49期	丸川	和大	120
マネージャーの仕事	50期	鈴木	里英子	120
財 産	50期	柳沢	祥康	121

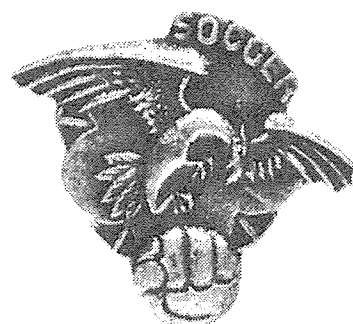
Ⅱ. 記録

1. 活動記録	125
2. 対外試合記録	129
3. 西高サッカー部歴代顧問の先生方	136
4. 西高サッカー部在籍者名簿	136
5. 在籍者数記録	140
6. 西高サッカー部OB会会則	141

おわりに	2期	城戸	昌夫	142
------	----	----	----	-----

個人文集

1. 顧問の先生
2. OB 諸氏の追想記
(十中7期～西高50期)



1949年に製作した西高サッカー部のバッジ
写真は実物を150%に拡大したもの
デザインは2期生と3期生で考案した。

西高サッカー部のルーツについて

初代顧問 上島 周蔵

戦前、戦中は緊迫した学校生活で、放課後サッカーを楽しんでいる余裕などなかったろうと思うし、記憶にも残っていませんが、以前一、二回地域の子供達のサッカーの面倒を見ながら先生のことを思い出していますなどの便りを貰ったことがありますので、それでも何かと、せめて校友会誌の郁朋でもあれば思い出すこともあるかと思うのですが、それまでの記録は一切の私物と共にあの火災で焼失してしましまして、何の手がかりもありません。しかし多分部の萌芽などなかったと思います。

従って、十中サッカーの出発は戦後からと考えてよいと思います。私は昭和20年3月松本五十聯隊に召集され、中学校の配属将校、外地出動近しといわれていた最中に終戦。十中に復帰したのが10月、それから22年6月に長野県に校長となり離任しました。

その間、教頭、学校火災、十八中合併とこの上ない多忙な期間、価値観の大逆転に教師の最も苦難の時でした。学校教育も米軍の指示により校友会も生徒自治会の結成となり、21年から22年にかけて自治会組織が本格的構成の緒に就いたと思われます。とすれば最高学年で生徒自治会結成に直接その衝に当たった関昭五君などが部の創設にもあたったのではないかと考えられます。

私が生徒達と一緒にサッカーをやったのは、私は松本の中学で六年間蹴球部の部長をやっており、十中にも何とか蹴球部をと願ったからでした。当時はまだア式蹴球 (association football) といっていたのですが、十中には蹴球をやった職員がおらず、私は多忙でなかなか思うようには時間が作れなかったのですが、体育科の平山先生に頼んでボールを出して貰い、同好の生徒の集まりを期待したことでした。

練習といっても、インステップキックとか、サイドキックとか、ドリブルとパス等、ヘッドイングといってもボカボカの球で、頭に当ててもあまり痛さを感じない球で、靴はズック靴だったと思う。

試合など職員相手にやったことがあったかどうか、記憶にもありませんが、フォーメーションは、フォワード5名、ハーフバック3名、フルバック2名、キーパー1名とほとんどきまつていて、大学高専のチームなどもみなそんな隊形をとっていました。

サッカーと私

元顧問 星野 五十夫

私が西高のサッカー部顧問を昭和40年代の一時期に、その末席を命じられた動機と、それに伴う奇縁について、思いつくままに綴ってみたいと思います。

在職27年間を通じて、私がいつも畏敬して止まない岡田信吉先生と少しでも身近に語り合える時間が持てたならというのが、そもそもの始まりです。それを実現するために、自ら進んで、顧問の末席を願い出たところ、快く認められたのです。先生は、36年の在職中、終始西高サッカー部の顧問として献身的に尽くされ、終に名誉顧問に推されたことは、諸君もよくご存じのことと思います。このような榮譽を受けられた方は、西高では例のないことと思います。

次に私がサッカーに興味を持ち始めた頃のことを振り返りますと、1960年（昭35年）に、天皇杯全日本選手権で、実業団の古河電工が、初めて優勝、古川出身の奥寺康彦選手が、後に、西ドイツで修業の結果、わが国で初めてのプロ選手として名乗りを揚げたと報じられました。1964年（昭39年）の東京オリンピックでは、強豪アルゼンチンを倒して8位に勝ち残り、目覚ましい活躍を見せました。当時を代表する選手としては、三菱重工の杉山選手や、早大出身で、ヤンマーの監督となった釜本選手らのすばらしい活躍が今も眼に浮かんで来るようです。

このようなサッカー熱がきっかけとなって次第にテレビだけでなく、身近な西高生を通して、高校生サッカーの真骨頂を知りたい気持ちになりました。受験勉強に余念のない生徒諸君が幾多の制約を乗り越えて、たゆまない練習と頭脳的プレーで善戦し、栄冠を勝ち得た時の喜びと満足感には、心打たれることがしばしばでした。公式戦の時はもちろん、放課後の練習の時、OBの誰かが顔を出している現場を見ることができましたが、そのような光景を眺めていますと、学校スポーツの暖かい場面に魅せられて感激しました。

昭和50年4月、私は西高を退き、高円寺南にある某女子学院に講師としてお世話になっていた頃、西高3期卒で、サッカー部OBの二人の方から、その令嬢が、同学院に在学されていることを知らされ、これこそ奇縁だと思いました。

私が西高を去って早くも22年、あの岡田先生が逝かれたのが、昭和61年2月2日（午前3時23分）、早くも11年余りとは、夢のように思われます。先生のご出生地が、愛媛県伯方（はかた）島であることを生前に承っていましたが、私が青少年時代を送ったあの広島市とは、瀬戸内海を隔てて、大して遠くはない地だと思うと、亡き先生には、まことに不思議なめぐり合わせだなという気がしてなりません。今折しも、国技館では大相撲9月場所の開催中、前頭水戸泉の大きな手から舞い落ち、観衆を沸かせる塩—あの塩こそ伯方島からもたらされたものかと思うとつい、今日もまた先生への追想に耽っているところです。

（旧職員、昭23～50年、86才、97.9.15記）

西高サッカー部創立50周年に当って

元顧問 三浦 史朗

西高サッカー部創立50周年を、迎えるにあたりまして心よりお慶び申し上げますと共に、OB会の皆様方の並々ならぬご尽力と、ご指導には感謝の気持ちで一杯です。

私が、西高に赴任しましたのが昭和59年4月で、この時からサッカーとの付き合いが始まったわけです。器械体操畑を歩んで来た私にとっては今思えば勇氣ある行動だったわけです。しかし、そんな不安も部員達やOBの方々が温かく見守り、そして私を取り組んで頂いたのでスムーズに溶け込むことが出来たことを、今でも忘れません。本当に感謝しております。以来、12年間に亘ってサッカー部との付き合いが始まったわけですが、とにかく私に出来ることは何であろうか？と言うことがまず私の脳裏を、駆け巡りました。サッカーの専門的な知識、経験のない自分に顧問としてどうやって行けばいいのだろうかかと悩みもいたしましたが、結局“常に部員と共に一緒に行動すること”が私の答えでした。

今でも思い出します60年の時でしたか……都大会への駒を進めた時のことで、ほとんどの試合がPK勝、常に守って、守って守り抜いて勝ち取ったと言う試合ばかりで本当に、素晴らしい集中力と、チームワークそして根性で戦い抜いたことを今でも忘れません。その後、現監督の菅井先生との出会いでさらに攻守揃ったバランスのいいチーム作りが出来、現在に至っていることは言うまでもありません。

また、OB会長の寺田様、並びにOB会の皆様方のご尽力の支えがありましたこと大変心強く顧問として励みにもなりました。

私にとって西高サッカー部と共に歩んだ12年間は決して忘れられるものではありません。今後もサッカー部の一層の飛躍を祈り、熱きエールを送りたいと思っています。



始まりの頃

十中7期 志村 正二郎

“混沌として……”と云うよりも、記録を亡失し、記憶も50年も前のこととなるとすっかり薄れてしまい、思いだせないことが多いが、始まりの頃から参加していた者として、土岐君達の強い要請もあり、なんとか覚えていることをまとめてみたい。

本領君の50周年記念パーティ不参加の連絡文にあったように、始まりの頃の私達クラス(十中7回生)のメンバーの過半が、戦争中グライダー部に属していた者達だった。

第2次大戦が悲惨な敗戦を迎え、当時中学3年生だった私達は、それまで教えられ、信じてきた多くの事柄が、一挙にしてくずれさり、正に茫然自失、なすべきことを見出すのに懸命だったのではなかろうか。

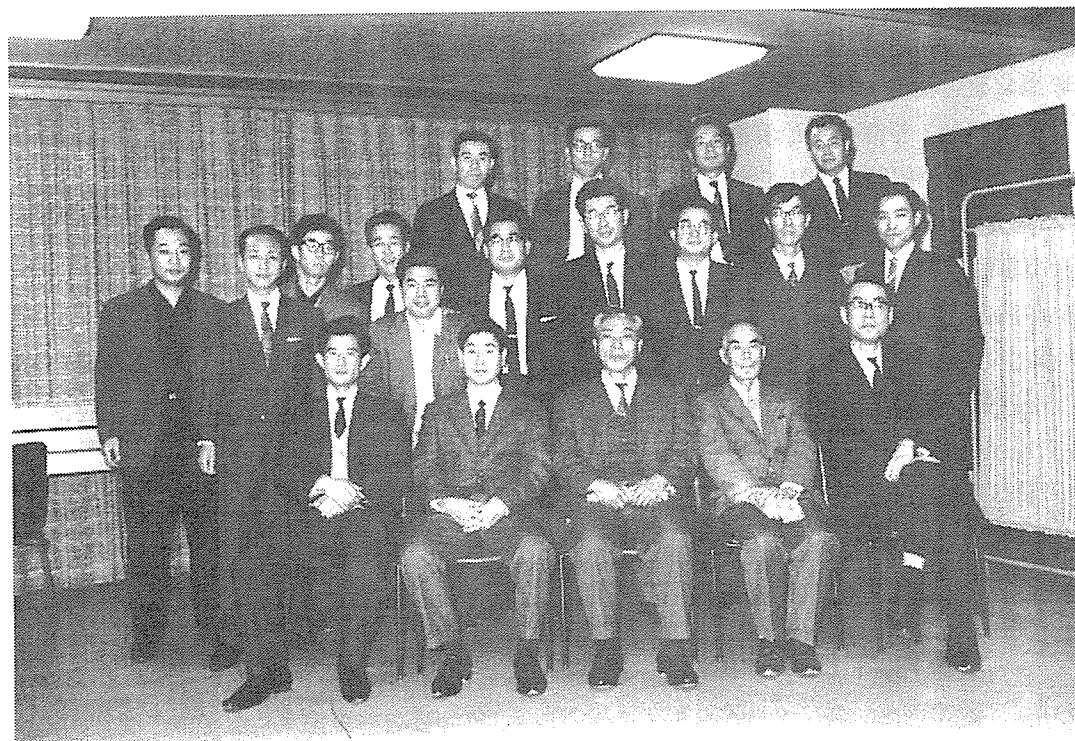
学校での授業は、今迄の教科書がGHQ(占領軍総司令部)の命令でほとんど墨で塗りつぶされ(若いOB諸君には想像もつかないことと思うが)果ては新聞紙1枚大に印刷されたものを折りたたんで使用するなど、食べるものもなく、十中でさえ弁当泥棒のうわさが流れる等の内で、課外活動として自然発生的にと当時思ったが、今考えてみると、生徒の混乱した感情をなんとか善導したいという体育の平山・小河原両先生を始めとする諸先生方の生徒に対する深い愛情から各種スポーツが始まって行ったのではないか。

ここで不思議に思うのは1年上級だった6回生が上級学校受験を控えていたためもあってか参加されていた記憶がなく、どのスポーツも私達7回生が中心だったことだ。

一番始めに様をなしたのが、私の記憶ではバレー部(当時は9人制)で、江藤、青木、高田、五井の諸君等やはりグライダー部(もっとも戦争中殊に私達が中学に入ってからには正課である柔道・剣道の他スポーツ?といえバグライダーしかなかった)のメンバーが主要メンバーで、バレー部はたしか私達の時代に、東京都で上位4校の内に入ったほど対外試合でも強かったが、もたもたしていた私が仲間に入ろうと思ったときは既に彼等のレベルが高くとても追いつけそうにもなかった。

この頃(1945年の秋～初冬頃か)7回生の学年主任で後に教頭になられた上島周蔵(愛称ガマさん)先生が復員後学校の講堂の舞台わきの所謂楽屋で生活しておられ、球を手配して下さり、はだしで蹴り始めたのが、所謂“始まり”だと思っている。それからだんだんに生徒が集まり始め、順不同で申し訳ないが私の同級では片山(早く亡くなって誠に残念なことだ)、本領、中川、内野、秋岡、梶川、関(彦太)、関(昭五)、田原(洋三)、西尾の諸君。1級下では、城戸、高村、田中、横山。2級下では柿沼、土屋、小松、中村等々の諸君が集まるようになり、昭和21年(1946年)4月以降は新1年生の柳沢、小畑君等も入ってくれるようになった。

平成3年青山で寺田君のきも入りでOB会がひらかれた時、関彦太君に本当に久しぶりに会い、その頃から古いOBの間で“始まりの頃”について話題になっていたのので、彼の記憶を聞いてみたところ、笑いながら“お前が蹴ろうよ蹴ろうよとあんまり誘うから始めたんじゃない



1967年11月22日、サッカー部創設にご尽力くださった初代顧問の「ガマさん」こと上島周蔵先生が松本よりご上京の折、25年間の長期に互り顧問をしてくださった「しわちゃん」こと岡田信吉先生をお招きして、NHK青山荘に草創期のメンバー(十中7期～西高3期)が集まり懇親会を開いた時の記念写真。

〔前列中央が上島先生、その右が岡田先生〕

か”と話してくれていたことを思い出す。彼はたしか途中からの転校生で、グライダー部ではなかったと思うが、サッカー（当時はアソシエーション・フットボール＝ア式蹴球といっていた）は最初から上手だった。又、片山君が熱心に皆を勧誘してくれていた。その関係もあってか、“始まりの頃”のメンバーは帝都線（今は井の頭線）通学生が多かったように思う。

前に書いたように、この時代は物資不足で、スポーツ等やること自体が一種の贅沢であったかも知れないが、球を蹴るにも、普通の靴すらない時代に勿論スパイクシューズなど手に入らず、あったとしてもとても高価で、中学生が親におねだりしても買ってもらえるものではなかった。従って裸足が一般的で、足の甲にタコができる人もまれではなかったし、ストッキングも、パンツもなく、昭和21年の運動会の写真にあるように、ズボンの裾をたくし上げ、地下足袋、軍靴でもあれば結構という有様だった。

少ない球自体も正に貴重品で、縫い目が破れれば自分達で繕い、強く蹴れば中のチューブがパンクするし、自転車のチューブ修理同様、ゴムノリで結構器用に修理したものだった。従って球が遂に球形たり得ず、歪んでしまい、凸凹したグラウンドと重なって、バウンドするとどこへ飛んでゆくやら、正に特別な勘が要求されるような状況だった。

食事も前述のように、特に成長期にあった私達にはとても満身にゆきわたるような量・質ではなく、皆腹をすかせながら、何故あんなにまで熱中したのか未だに答えは出てこない。きっとそれ迄、子供のときから叩き込まれた“大きくなったら立派な兵隊さんになって、お国のために尽くすんだ……”といった思想の大転換を余儀なくされ、信じていた事・人に裏切られた感情のもって行く場にサッカーを求め、それに没頭しようとしたのかも知れないと思っているが、それにしても上達しなかったし、いつもヒョロヒョロ走っていたと思う。

その後は、私は小さい時からなぜか海が好きだったので、中学4年修了で入学できる水産講習所（現東京水産大学）を受けたところ、何とか入ったので、十中サッカー部を一番早く卒業した仲間になった次第（昭和22年3月修了）。従ってどんどん成長し、都の1部リーグにまで進んでいった活動には、残念ながら何らの貢献もしていない。

4年生から入った水講でもサッカー部に入ったが、周りはおっちゃんばかりで、何ともすさまじい練習だった。グラウンドは広いが、岩盤をけずった後の固い石でざらざらしており、FBだったので繰り返しのスライディングの練習で、脛は傷だらけで今も残っているが、キャプテンは元海軍中尉の飛行機乗りで、不時着3回生き残りの猛者、率先垂範の神様みたいな人、同期には神戸一中でキャプテンだった男等々とても練習について行くだけがやっとのこと、休暇で十中に行くと、まことにホッとして楽しく球が蹴れた思い出がある。

水講2年の始めに父が亡くなり、残念ながらサッカーを止めざるを得なくなり、アルバイトで行っていた鯨のベーコン工場での端物を時折後輩諸氏の栄養補充に供した位で、更に14年間船に乗ったためすっかり脚力も低下し、岡田先生に“志村よ時々顔を出して後輩連中を見てやってくれよ”といわれながら、遂にそのご要請に応えられなかった次第である。

以上、思い出すまま書き並べてみたが、勿論のこと異論のある方もおられようし、又氏名を忘却し誠に失礼申し上げた方々もおられると思うが、何卒ご容赦下さるようお願いして終るとしたい。

何ととっても50年とは長い期間だと思う。



1946年11月の運動会で蹴球部初めての試合を先生と行う。写真中央は細田菊雄校長、右は体育の平山清太郎先生、左は国語の井上敬一先生。スコアは2-1で生徒の逆転勝ちという話もあるが不明。



運動会の試合に出場した生徒チームイレブン。帽子をかぶっている者も試合中は鉢巻をし、裸足の者も何名かいた。